



日本の システムインテグレーション業界 の現状と課題から学ぶ

内製化成功のカギはローコード開発



はじめに

近年、システム開発を取り巻く環境は大きく変化しています。

クラウド、AI、IoTといった技術の進化に伴い、企業にはより迅速かつ柔軟なシステム開発が求められています。

しかし、多くの企業ではシステムベンダー(SIer)への依存が続いている、開発スピードの遅れやコスト増加、ベンダーロックインといった課題に直面しているのが現状です。

こうした状況のなか、自社でシステム開発を担う「内製化」が注目されています。

内製化を進めれば、開発コストを抑えながら、業務の変化に即応できる

柔軟なシステム運用が可能です。その実現手段として、

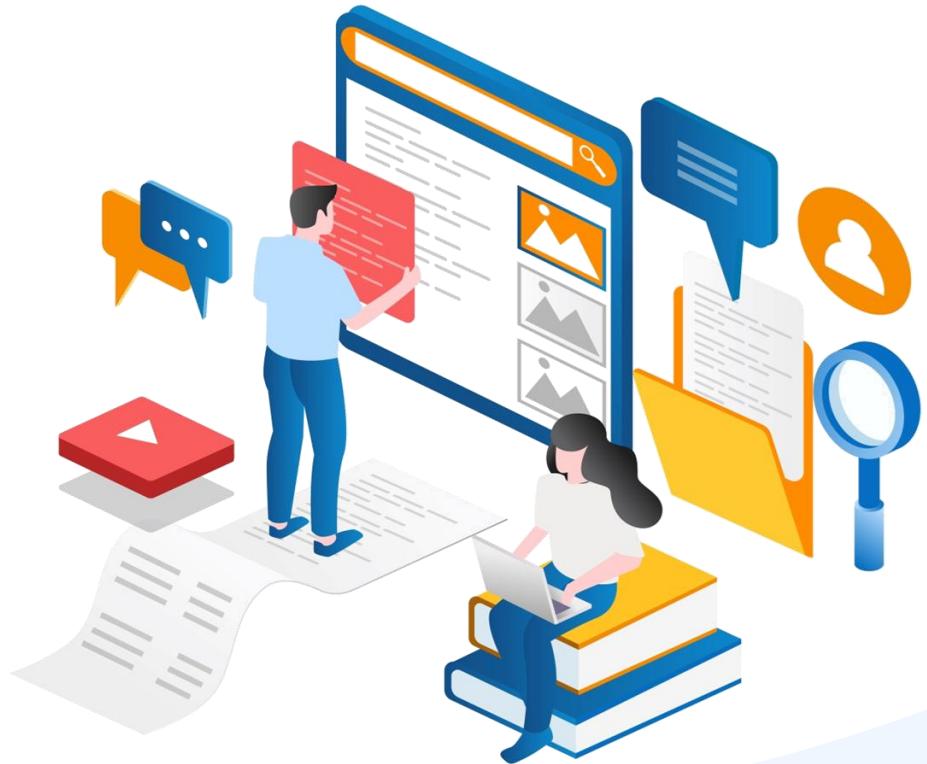
プログラミングの専門知識がなくても開発ができる、「ローコード開発」が多くの企業で採用されています。

本資料では、システムベンダー依存のリスク、内製化のメリットと実現方法、そして内製化への移行ステップや成功事例について詳しく解説します。



目次

1. システムインテグレーション市場の現状と課題
2. システムベンダー依存によるリスク
3. システム開発を内製化するメリット
4. ローコード開発が提供する4つの解決策
5. システムベンダー依存から内製化への移行ステップとポイント
6. ローコード開発ツールの選定ポイント
7. ローコード開発プラットフォーム「intra-mart」とは
8. intra-mart導入による内製化の成功事例
9. まとめ



日本のシステムインテグレーション市場の現状と課題

日本のシステムインテグレーション業界は、技術革新と社会情勢の変化により、大きな転換期を迎えていました。日本のシステムインテグレーション市場の現状と課題は以下のとおりです。

システムインテグレーション市場の現状

システム開発の需要増加

クラウド・AI・IoTの発展により、新たなシステム導入・改修のニーズが拡大。



スピード重視の開発要請

社会情勢の変化が激しく、迅速かつ柔軟なシステム開発が求められる。



システムインテグレーション市場の課題

IT人材不足

ITエンジニアの慢性的な不足により、開発リソースの確保が難しくなっている。経済産業省によると、2030年には国内で約79万人のIT人材が不足すると予測されている。



システム開発の硬直化

ウォーターフォール型の開発手法が主流のため、要件定義からリリースまでの期間が長く、変化に対応しづらい。柔軟性の低い開発体制が課題となっている。



従来のシステムベンダー依存型開発では、IT人材不足と開発の硬直化により、
迅速かつ柔軟なシステム開発の需要に対応しにくくなっています。

出典: 経済産業省 IT人材の最新動向と将来推計に関する調査結果 https://www.meti.go.jp/shingikai/economy/daiyoji_sangyo_skill/pdf/001_s02_00.pdf, P6

システムベンダー依存によるリスク

多くの企業がシステムベンダーにシステム開発を委託していますが、長期的なシステムベンダー依存には以下のようなリスクが伴います。

⚠ ベンダーロックインのリスク

システム変更や新規開発時に依存しているシステムベンダーにしか声をかけることができず、新たな技術を持つベンダーやコストパフォーマンスの高いベンダーに依頼することができないため、柔軟性の低下や高コスト化しやすい。



⚠ 開発スピードの遅延

特定のシステムベンダーが抱える要員の空き状況次第で、機能追加や新しいシステムの開発が希望したタイミングで実施されず、時代に合わせた業務の迅速な改善が困難となる。



システムベンダー依存は開発の柔軟性低下やコスト増加を招き、**企業の競争力を損なう要因**となり得ます。

内製化によるメリット

システムベンダー依存のリスクを回避する方法の一つが、システム開発の内製化です。企業が自社内でシステム開発を行うことで、以下のようなメリットを享受できます。

内製化の主なメリット

メリット 1	メリット 2	メリット 3	メリット 4
開発コスト削減  SIシステムベンダーへの外部委託費用を抑え、長期的にコストを削減できます。	開発スピードの向上  社内で開発・修正を行うため、変更対応が迅速になります。	自社ニーズの柔軟な反映  社内でのやり取りで完結するため、業務部門のニーズをシステムへ反映しやすくなります。	開発ノウハウの蓄積  ITスキルや開発ノウハウを社内に蓄積し、継続的な業務改善が可能です。また、自社のITスキル向上につながり、DX推進の基盤を構築できます。

内製化を実現するには、**プログラミングの専門知識が不要**で、

業務部門でも開発に参加できる**「ローコード開発」**が最適です。

ローコード開発は、システムの迅速な構築と柔軟な運用を可能とし、内製化の実現を強力にサポートします。

ローコード開発が提供する4つの解決策①

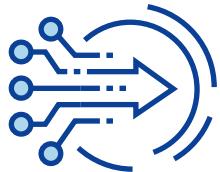
内製化を成功させるためには、企業の課題を解決する仕組みが必要です。

ローコード開発は、システム開発のスピードと柔軟性を高め、以下の解決策を提供します。

解決策 ①

IT人材不足を補う迅速な開発

プログラミングの専門知識がなくても、業務部門の担当者がドラッグ＆ドロップ操作で直感的にアプリケーションを開発可能です。開発を簡略化し、短期間でのシステム構築を実現できます。



解決策 ②

ベンダーロックイン回避

特定のシステムベンダーに依存せず、自社主導でのシステム開発・運用体制を構築できるため、開発・運用の自由度が向上します。また、既存システムの変更や拡張を自由かつ柔軟に実施でき、業務の変化に即座に対応可能です。



ローコード開発を活用すれば、IT人材不足の課題を克服し、企業の成長に応じた柔軟なシステム運用が可能です。

特定のシステムベンダーに依存せず、自社主導で開発・運用できるため、
ビジネス環境の変化にも迅速に対応できます。

ローコード開発が提供する4つの解決策②

ローコード開発は、企業のシステム開発におけるコスト削減と業務部門との連携強化にも大きく貢献します。

解決策 ③

開発コストの低減と効率化

開発時間の短縮により、開発・運用コストを削減できます。小規模なプロジェクトでも迅速に対応でき、段階的なシステム導入が可能です。また、開発言語のレガシー化によるメンテナンス・維持コストも発生しません。



解決策 ④

業務部門との連携強化による開発プロセスの最適化

業務部門とIT部門が協力してシステムを開発できるため、要件定義のズレを防げます。また、業務の変化に即応し、開発の手戻りを削減することで、開発プロセスを最適化できます。



ローコード開発を活用すれば、開発コストを削減しながら、業務部門とIT部門の連携を強化し、スムーズなシステム開発が可能です。業務の変化に素早く対応し、企業の競争力を向上させることができます。

システムベンダー依存から内製化への移行ステップとポイント①

システムベンダー依存からの脱却には、計画的な移行ステップを踏むことが重要です。まずは、自社の現状を把握し、目標を設定したうえで、開発手法やプロジェクト管理の仕組みを導入する必要があります。

STEP
01.

現状分析と目標設定

既存のシステムベンダー依存度を評価し、内製化すべき領域を特定します。そして、内製化による目標(コスト削減、開発スピード向上)を設定し、KPIを明確化します。既存のシステムベンダー依存度の評価方法は以下のとおりです。

- 既存のシステム環境を可視化
- システムベンダー依存の度合いを分類(システムベンダーに頼らないといけないもの、頼らなくてよいもの)
- システムベンダー依存度の数値化
- 影響度と優先順位の分析・内製化対象システムの選定



STEP
02.

アジャイル開発手法とプロジェクト管理ツールの導入

内製化に適した「試行→修正→改善」を繰り返すアジャイル開発を導入し、柔軟な開発環境を整えます。また、プロジェクト管理ツールを活用し、内製化の進捗を可視化してタスク管理を円滑にします。



内製化の第一歩は、**現状のシステムベンダー依存度を正しく把握し、目標を明確に設定すること**です。
そのうえで、**柔軟かつ管理しやすい開発環境を構築することが重要です。**

システムベンダー依存から内製化への移行ステップとポイント②

内製化の成功には、適切なツールの導入と、開発プロジェクトの定着化が欠かせません。
ローコードツールの活用と、段階的な内製化が成功のカギとなります。

STEP
03.

ローコードツールの導入

自社の業務要件に適したローコード開発ツールを選定します。そして、試験導入(PoC)を実施し、
実際の開発業務、その後のシステム運用に適合するか適合するかを検証します。



STEP
04.

内製プロジェクトの開始と定着化

小規模プロジェクトから内製化を開始し、成功事例を積み重ねます。
内製化の範囲を拡大し、業務改善のPDCAサイクルを確立して、継続的なチームの育成と教育も実施します。



ローコードツールを導入し、**小規模な内製プロジェクトから段階的に進めること**で、スムーズな移行が可能です。
そして、**成功事例を積み重ね、開発体制を定着させること**が重要です。

ローコード開発ツールの選定ポイント

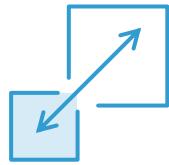
ローコード開発を成功させるためには、自社の業務に適した最適なツールを選定することが重要です。特に、以下の4つの観点から検討する必要があります。

使いやすさ・操作性



- 直感的なUI(ユーザーインターフェイス)/UX(ユーザーエクスペリエンス)で、業務部門の担当者でも簡単に操作・開発ができるかを確認します。
- コードを記述しなくても、画面設計やワークフローの作成が可能かどうかも重要です。

柔軟性とスケーラビリティ



- ERP・CRM・外部APIなどの既存のシステムとスムーズに連携できるかを確認し、企業の成長や業務拡張に応じて段階的にスケールアップ可能なツールを選定しましょう。
- また、プロコード(プログラミング)が必要となった場合に、同一ツールで対応できるかも重要な観点です。

セキュリティ



- シングルサインオン(SSO)、多要素認証(MFA)、暗号化によるデータ保護、操作履歴の監査ログ機能など、自社のセキュリティ要件を満たしているかを確認します。
- 第三者機関によるセキュリティ要件のチェックレポートなどを参考にすると良いでしょう。

サポート体制



- ベンダーのサポート品質が高く、導入支援や運用時のトレーニングが充実しているかを確認します。
- FAQ・ヘルプデスク・技術者向けドキュメントなどの情報提供が整っていることも重要です

ローコード開発ツールは、

業務部門でも使いやすく、拡張性・セキュリティ・サポート体制が十分なものを選ぶことが大切です。

ローコード開発プラットフォーム「intra-mart」とは

intra-mart(イントラマート)は、エンタープライズ向けのローコード開発プラットフォームです。企業の業務プロセスをデジタル化し、システムの柔軟な開発・運用を支援する機能を備えています。

さらに、生成AI連携機能「IM-Copilot」により、開発の効率化と業務自動化を加速させます。

もしプロコード(プログラミング言語によるコーディング)が必要となった場合でも、intra-martは対応が可能です。



intra-martの特徴

IT統制(システム共通基盤)	業務改善(プロセスのデジタル化)	DevOps(ローコード開発)	DX推進(DX推進サポート)
<ul style="list-style-type: none">他システムとの連携でユーザビリティ向上バラバラな業務システムを効率化	<ul style="list-style-type: none">業務プロセスを可視化し、改善点を最適化PDCAサイクルを回しながら業務改善を進展	<ul style="list-style-type: none">開発から運用までのシステム内製化を実現ドラッグ＆ドロップなどの操作でアプリ開発	<ul style="list-style-type: none">お客様のDX/業務プロセス改革をサポート実践と改善を繰り返し、業務プロセス改革を実現

IM-Copilotとは？

IM-Copilot は、intra-mart上で生成AIを利用した業務アプリケーション開発、および intra-martの各種製品で生成AIを活用するための基盤機能です。作成されるシステムに対し、生成AI機能を簡単に組み込むことができます。

✓ 文章の生成 / チャット

✓ 画像生成

✓ 文字起こし

✓ 音声生成

✓ 埋め込み

intra-mart導入による内製化の成功事例

システム開発の内製化に取り組む企業が増えるなか、intra-martを活用することで、業務の効率化やデジタル化を推進し、DXを加速させた成功事例が多数あります。

intra-martを活用して内製化を成功させた2つの企業の事例を紹介します。

事例 1

オリックス生命保険株式会社



課題	社内の業務基盤として長年活用してきたNotesの刷新と、現場主導のアプリケーション乱立
実施内容	サイロ化、肥大化したシステムの集約と紙申請のペーパーレス化を内製で実現
効果	情報システム部門のケイパビリティ向上と、各部門の業務の高い解像度での把握

事例 2

トヨタファイナンス株式会社



課題	紙ベースの業務プロセスが数多く残り、RPAやマクロ機能の活用だけでは限界
実施内容	アジャイル型の内製開発で1,000件近いアプリケーションを開発
効果	多くのアナログ業務をデジタル化し、ライセンス費用分の投資は導入後1年で回収

intra-martを活用することで、システム開発の内製化を成功させ、業務の効率化とDX推進を実現できます。

ローコード開発により、**短期間での業務アプリケーション開発が可能**となり、

コスト削減と柔軟なシステム運用を両立できます。

まとめ

日本のシステムインテグレーション業界の現状と課題を踏まえ、内製化を成功させるためのポイントは以下のとおりです。

POINT 1



システムベンダー依存のリスクを把握

- ・ベンダーロックインにより、開発コストの増大や柔軟性の低下が発生。
- ・開発スピードが遅くなり、業務の変化に迅速に対応できない。

POINT 2



内製化のメリットは大きい

- ・開発コストの削減や、業務部門のニーズを迅速かつ柔軟に反映。
- ・開発ノウハウを蓄積し、企業のDX推進を加速。

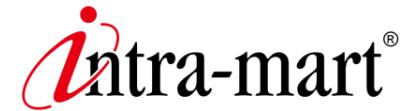
POINT 3



ローコード開発が内製化をサポート

- ・非エンジニアでも開発可能な環境を整え、システム開発の内製化を促進。
- ・アジャイル開発やプロジェクト管理ツールと組み合わせることで、スムーズな運用が可能

POINT 4



intra-mart活用により内製化とDX推進を強力にサポート

- ・業務プロセスのデジタル化・自動化を実現し、開発の効率化を支援。
- ・システム共通基盤として、業務改善とDX推進を一元的に管理・推進。

ローコード開発の導入は、単なるシステム開発手法の変革ではなく、**企業の競争力を高める重要な施策**です。
本資料を参考に、自社に適した開発体制の構築を進め、
内製化実現に向けてアクションを起こしてみてはいかがでしょうか。



株式会社NTTデータ イントラマート

東京都港区赤坂四丁目15番1号 赤坂ガーデンシティ5階



<https://www.intra-mart.jp/>



contact@intra-mart.jp

- 掲載内容は2025年3月現在のものです。
- intra-martは株式会社NTTデータ イントラマートの登録商標です。
- その他の各種製品名は、各社の製品名称、商標または登録商標です。